

令和 7 年度 第 2 回高橋地域会議 会議録

日 時：令和 7 年 4 月 30 日（水） 19 時 00 分～20 時 30 分

場 所：高橋交流館 多目的ホール

出席者： 太田市長

＜地域会議委員＞ 青山 昇、青山 光、天野 泰弘、安藤 彰浩、池田 寛、
今井 尚、今井 ひろみ、折田 義幸、黒野 剛司、
柴田 淳二、塚原 千紘、那須 義崇、増田 純江、
村山 雄司、山内 秀則
（欠席者）小野田 泰士、加藤 京子

＜市域活躍部＞ 青木部長

＜高 橋 支 所＞ 前田支所長、出口副支所長、加藤副主幹

＜傍 聴＞ 4 名

≪内容≫

1 豊田市民の誓いの唱和

2 会長あいさつ

3 提言書授受・提言内容説明

今井会長から豊田市長へ提言趣旨を説明後、提言書を手渡した。その後、提言内容について、山内委員（高齢者支援）、青山委員（担い手不足）から説明した。

4 市長あいさつ

- ・ 2005 年の市町村合併以降、地域会議が 20 年続いており、こうして活動していただいていることに感謝している。
- ・ 市民の誓いは、1978 年に制定され、半世紀に渡って様々な機会に唱和されて続いているのは豊田市ならではの取り組みだと思う。制定して終わりではなく唱和されているのは珍しいと思う。そういう素地があって、自治区活動、地域会議の活動が継続的に続いていることは、豊田市の一つの財産であり、まさに地域力だと思う。
- ・ 提言されたことが全て思い通りにいくわけではないが、地道に一つずつ解決することが将来の高橋地区のためになると思うので、引き続き、よろしくお願いします。

5 意見交換

「高齢者支援」及び「担い手不足」のテーマごとに、そのグループメンバーが市長を車座に囲んで意見交換を行った。

（1）高齢者支援

（委員）・高齢者支援の話し合いの中で「共助交通」という難しいテーマに取り組んだ。
共助交通の説明を受けたり、各地区の取り組みを見てきたが、高橋地区に当ては

めると、都市部と農村部で状況にばらつきがあることがわかった。次への命題として取り組んでいけないかと考えた。

- ・また、若いメンバーからは、高齢者にとってコミュニケーションが重要であるという意見が出た。若い人と高齢者がコミュニケーションを取るためには、どのような機会を作れるのかを考えてきた。今日は市長にお越しいただき、意見交換の中で今回のテーマに関する完了としたい。

(市長)・共助交通の前段として、地域バスは、100 人いたら 100 人の希望を叶えることは難しい。地域バスは現実的ではない。一度運行を開始したバスを廃止することも難しいが、地域バスを廃止してその財源を共助交通に振り分ければ可能かもしれない。また、共助交通は地域によって異なるアプローチがあり、担い手と利用者のチームが必要で、リーダーシップを発揮する人がいないと成立しない。

- ・高齢者のコミュニケーションは深刻な問題。高齢者同士だけで楽しむのではなく、地域に必要とされる活動を行うことが重要である。市木町では、高齢者クラブが週に 1 回、誰でも参加できるサロンを設けている。地域にとって無くてはならない存在となることがこれからの高齢者クラブであり、自治区も同じこと。
- ・子どもたちとの関わり方は重要であり、大人が子どもたちの役割を決めるのではなく、子ども自身が意見を言える環境を整える必要がある。
- ・デジタル化に関する話題でも、年配者は理解できないことが多いが、地元の中学生から教わることもできるかもしれない。
- ・高齢者の抱える恐れや将来への不安についても、実際に困っていることに焦点を当てて話し合うことが重要であり、孤独や孤立をテーマにする際には、関わりを望まない人もいるため、そのアプローチが難しいと感じている。

(委員) 介護タクシーの活用について、補助を出したり上手く利用することはできないか。

(市長)・介護タクシーは、利用者と事業者の一对一の関係。人と関わりを持ちたくない利用者があり、お金を出してモノやサービスを買って生活が成り立っている。家族でも同じ。ごみを捨てに行くことさえ家族に頼らない。そういう世の中になってきていることをずっと感じている。

- ・特養くらいいけが行っているドアツードアの送迎サービスのような地域の取り組みが求められている。
- ・共助交通は、ぜひためていただきたい。

(委員) 地域でのボランティア活動やサロンの開催は必要だと思うが、そのアプローチには難しさもある。

(市長) 地域の中で小回りの利く範囲でやった方がよい。他地区の良い取り組みを真似したり、紹介し合う機会を設けるとよい。

(2) 担い手不足

(委員) 市はデジタル化を進め、記入例を作成したり、制度を親切に説明してくれたり良くやってくれている。しかし、話し合いを進める中で、区長経験者から、自治区

の仕事は多岐にわたり負担が大きいと言われている。自治区の中で担い手を探すのは難しく、仕事を辞めた後に自治区の仕事をするのではなく、働きながらもその業務ができると良い。仕事を辞めてからしかやれない自治区の仕事では、ますます担い手が少なくなる。また、デジタル化の推進によりパソコンなどの道具は充実したものの、それをうまく使うための支援が必要。

(市長)・正直、実態が良くわからない。自治区事務の運営支援や市の依頼事務の削減は、長年の課題であり、市の職員も共有している。市と自治区の運営には、それぞれの独自性があり、何に本当に困っているか具体的に知りたい。

・「市からの事務の見直し」と言われても、必要なことと不要なことを明確にして欲しい。また、市役所は情報を速やかに伝えようと広報やプレス発表をしているが、自治区の回覧板で情報を伝える方が現実的であると感じている。

(委員) 行政からの依頼事項で、区長が一番困るのは委員などの人探し。一生懸命探して居ないと、結局、区長自身がやらざるを得ない。そういう姿を見てから区長のなり手が益々いなくなる。そういう人がこの場（地域会議）にいる人だと思う。

(市長) 40代でも区長ができる仕組みは成り立つか？

(委員) できると思う。逆にできない理由を教えて欲しい。

(委員) 40代は子育てや仕事の真っ最中で多忙なため、地域活動に積極的に参加するのが難しい。

(委員) 現役の区長だが、突発的な事務に直面したときに対応できないことを申し訳なく思っている。

(市長) そこは自治区の中で、補い合うしかない。区長が全部担うことはできない。

(副会長) 最後に、提言のテーマ以外で、これだけは話しておきたいことがあれば、お願いします。

(委員) 市営住宅の管理人をしている。昨年度からよりそい支援課が、「住むところがない人に対して3か月だけ支援をしよう」という流れで人が入ってきている。ほぼ、単身の高齢者で身寄りのない人。そういう支援をするなら、できれば若い人を、3か月と言わずもっと長く生活基盤ができるまで長く支援して、地域に入ってきて自治区活動に参加して欲しい。

(市長) よりそい支援課が立ち上がって、これからの課題の一つとして、「身寄りのない単身の高齢者をどうやってサポートしていくか」がこれからの課題。試行錯誤しながら進めていきたい。引き続きよろしくお願いします。

6 市議あいさつ

会議を傍聴した古木 吉昭議員、田代 研議員、岩田 淳議員があいさつした。